

キムソクポム

金石範さん (作家)

未来のために歴史を見つめ直せ——墨者は歴史に学ぶ——

二〇一〇年は、日本による韓国併合から百年、朝鮮戦争から六十年、四・一九学生革命から五十年、そして光州事件から三十年にあたる。日本と韓国の近現代史のさまざまな節目の年に際し、金石範さんがいま何を感じ思っているのかを聞いた。

しよせん、そういう国……

——百年前の八月二十二日、日韓併合条約が調印され、続く二十九日、韓国では国恥日とされていますが、朝鮮総督府が設置され、日本の植民地支配が始まりました。百年という節目をどうお感じになりますか。

ある出来事から五十年目、あるいは百年目ということとは、たまたまそういう年回りだということであって、とりたてて大きな意味があるとは思いません。ただし、そうした節目は歴史を振り返る契機にはなると

は思いますね。

過去を振り返る——どんな出来事が起きたのか、事実はどうなのか、そしてそれはどのような影響をもたらしたのか。個人的なこともあれば社会的な問題もあるでしょうが、そうした過去の記憶は人間にとって非常に重要です。節目はそうした過去、それが誤ったものであれば思い直したり、あるいは仕切り直すきっかけにすることができます。

私たちが生きている現在は過去の積み重ねです。どのような過去があったのか、その過去の事実を検証し、次世代にどう伝えていくのかは、現代を生きる人にと

って大切な責任のほうです。

しかしそういう観点で見たとき、残念ながら日本は過去の検証作業をきちんとしていないと言えませんが、悲しいことですが、もはや私は日本という国は、しよせんそういう国なんだという境地になってしまっています。

——具体的には、どういうことでしょうか。

中国や朝鮮半島など、東アジアで何か歴史的な問題



●キム・ソクポム 1925年生まれ。濟州島出身の両親のもとで大阪に生まれる。京都大学文学部美学科卒業。主な作品に『鴉の死』『万徳幽霊奇譚』『ことばの呪縛—「在日朝鮮人文学」と日本語』『夜』『火山島』など。『火山島』で大佛次郎賞、毎日芸術賞を受賞。同書は韓国でも翻訳され評判を呼んだ。現在、月刊誌『世界』で『過去からの行進』を連載中。

に関わる軋轢が起きたとき、弁明に奔走するのは日本だけです。それはなぜか？ それは過去をきちんと清算してこなかったから、そのつどその場しのぎの弁明が必要になるのです。

それは韓国も同様でした。韓国が過去の清算に乗り出したのは、軍人ではなく文民出身の金大中政権からです。金大中政権を引き継いだ盧武鉉政権は、本格的に親日派の問題に取り組み、清算に乗り出しました。だが社会的に主流の流れとなるまでには至っていません。しかも李明博政権になってからは、ニューライト側から「親日派は愛国派だった」といった主張も登場しています。あるいは一九四八年八月十五日を建国の日にしようという動きもあります。しかしあの日は、私たちにとって分断が始まった日であり、その日を建国の日にするというのは、おかしいと言いたいようがない。そういう意味で、逆戻りはありながらも、金大中政権以降、過去の清算に取り組んできたのが韓国です。しかしそれは韓国国内で検証・清算できる問題であって、日本との関係の中で検証・清算できる問題となると手つかずのままがほとんどです。

日本の直近の歴史問題にはアジアへの侵略問題があ